

協働校事業 小・中教材研究会IIを終えて

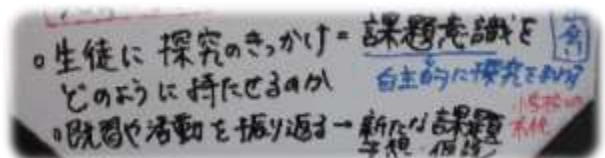
研究協議
竹田指導主事のご指導・ご助言
齊藤先生のご講話より

中学校 理科教材研究会(8/31)で学んだことから、
教科主任が教科会で確認したいこと

- 国語**
 - ・理科の実験結果を国語の授業でレポートとしてまとめるなど、**教科等横断**を考えていきたい。
 - ・自然事象から生徒が問いを見出す。国語でも生かしていけないか。
- 社会**
 - ・学びの主体を生徒にするための単元づくり、授業づくり。
 - ・7年間の学びをどう描いていくか。
- 数学**
 - ・数学的活動のプロセスを生徒自らが回せるようにする。
なぜか → ・プロセスの中に能力がはりついているから。
・数学的活動を回すこと自体が数学的思考であり、
そのためには見方・考え方を働かせるから。
 - ・単元末に身に付けさせたい「能力」を具体的にしておく。
どのように → 「能力」は何をするための力なのかを答えられるようにしておくこと。
- 理科**
 - ・探究のサイクルを見直して、より大きなサイクルで生徒が回せるようにする。
 - ・単元を通して解決したい問題を設定して単元構想したい。
- 英語**
 - ・それぞれ小～中の段階で、何をやる力を育てるのか、小学校とする指導が中学校にどう関連するのか、それぞれの学年でなぜそれをやるのか、英語では明確にしづらいことかもしれないが、確認の必要があると感じた。
- 体育**
 - ・理科の汎用的に問題解決する力が、体育の中でも同じように考えられる。多面的に考察する力、実際にやった自己やチームの実技結果を分析し、仮説(=作戦)を立て、練習計画を立て、試技や試合を行う。そしてまた繰り返す。
 - ・講話の中では探究のプロセスと言っていたが、保健体育の中もそのプロセスを学年が上がることに質が上がっていくように単元構想を考えていくべき。

・既に確認している教科会もありますが、全ての教科会で「何を学んだのか」、「何を実施していくのか」等の確認をしてください。
・当日の振り返りは「研究だより」を参考にしてください。
・音/美/技/家は教科主任が当日欠席でしたが、教科会で共有をお願いします。

*太字箇所判断：松本



理科チームの協議記録です。ここにどの教科にも通じる授業づくりのポイントが書かれています。

各教科では、理科の探究の過程を読み解きながら、それぞれ自分の教科に通じるものがあるという気付きもありました。

小学校 理科教材研究会(9/6) 齊藤先生のご講話から教科共通して先生方と共有したいこと

- 単元構想では、教師のやりたいことが先に出てはいないか、学びの文脈を子供たちが納得するかを考える。
子供たちが真剣に、むきになっていくような、オーセンティックな(真正な)学びを描くことが大切である。
- 学習対象について、十分な教材研究ができているかを振り返る。
子供の疑問に答えるために教材研究をする。
- 学習対象の概念を押さえながら授業を進める。
子供は学習対象(この単元の学習対象は“溶ける”)をそれまでの生活経験や知識をもとに、それぞれの解釈でイメージしているため、全体で1つ1つ概念を押さえしていく必要がある。
- その学年で、なぜその学習をするのか、それにはどんな価値があるのかをおさえておく。
例えば、小学校5年の理科では、“条件制御”つまり解決方法の選択と実行ができるプランニング力を育成することが求められる。それは、条件制御によって問題解決できるようにするためである。
そのためには「問い続ける子供」にしたい。そのためには「問い」は科学的内容の価値があるもの、子供の関心の真正さ、必然性、切実さがあるものであることが大切である。
- 子供の発言を価値付け、生活知を最大限に活用することで子供たちを真正さの追究に誘う。
子供の発言を価値付け、今回の理科であれば、生活知を科学の知にしていくことで、子供たちは、自分たちの生活事象には科学があることに気づき、今勉強していることに価値を見出す。生活知を最大限に活用する。

これもそれぞれの教科に当てはめて考えることができますね。